

## 人の行く裏に道あり 花の山!

### ●浦高同窓会・講演会 その2

東京外国語大学教授の峰岸真琴氏(高 27)による「浦高生を『無教養なグローバル人材』にしないために」の続きを綴ってまいります。

\* \*

### ◆現地での協力者に招いてもらうには?

現地での協力者に招いてもらうには? 現地の研究者、協力者(×インフォーマントではなく、○コンサルタントと呼んでいます)の理解と信頼を勝ち得ることが重要です。そのためには、専門分野の経験と知識と調査技術など、実力で現地の研究者を凌駕することが大切です。また、現地の研究者に調査目的を理解してもらうことが大切です。そして、**人間的に信頼されること**がもっとも重要です。必ず現地と共有できる成果を挙げていくことが信頼関係に繋がります。

\* \*

### ◆インドで人間的に信頼されるために

最初の例は、インド・カルナーカタ州のマイソールという土地での研究(1988~89年)です。カルナータカは古代インドの有力な帝国の地でもありました。インド中央諸言語研究所と日本側調査団の国際共同研究という形で参加しました。



〔食事風景〕

この写真は食事風景なのですが、現地の研究者(大学教授)たちと食事をしているところです。インドの食事はアンリミテッドですので、断らない限り継ぎ足されます。私は1年間で10数キロ太りましたが、右手でカレーを食べながら、左手では断るジャスチャーをしなければいくらでも足されます。残すことは失礼なので全部食べきらなければなりません。こうした文化を知らなくてはいけないのですが、実は私はここでインド人の教授と2日間にわたる激論をして眠れぬ夜を過ごしました。相手は、インド音声学の権威の大学教授でした。

パンジャブ語の音韻解釈を巡って対立し、2日間、合計4時間にわたる激論でした。最初の日は夜になったので分かれてしまいましたが、私は眠ることができません。翌日も朝から激論を交わしたのですが、翌日はインド教授が和やかに接してくれたのです。現在のインドではカースト制度はありませんが、年長者や目上の人を大切にする風習が残っています。ですから、衆目の中で年長の教授と助手の私が激論を闘わすことはタブーに近いものがありました。しかし一方で、大学では卒業にあたって生徒が先生と議論を闘わせて乗り越えていくことで一人前と認められるということもあります。そういう文化を知らず知らずに私はやっていた訳です。衆目は、あいつは大したものだと認めてくれました。怪我の功名です。

ただ、議論は伝統文化の一部で打ち勝たなければならぬとしても、全面的に勝つ必要はありません。周りが見守っている中で、優勢勝ちくらいが望ましいのです。

こうしたことがインドの研究者とのコミュニケーションの取り方です。ですから、非常に疲れますね。

\* \*

### ◆相手の文化的背景・社会情勢を理解する

次の例は、先ほどご紹介した東北インド・メガラヤ州でのカシ語調査の場合です。

ここは国境地域です。入るにはインド内務省の特別許可が必要です。

「調査」と申請したのでは絶対に無理です。そこで、カルカッタに滞在して入域新制の手紙をデリーに送りました。すると、10日ほどで「無期限に入域してよい」との許可状が送られてきました。なぜでしょうか。

インドは植民地になった経験から、外国人を大変警戒しています。しかし、**非常にプライドの高い人種でもあります**。そこで私が送った手紙には、「偉大な研究者の方に教えを乞いたい」と書いたのです。すると、**学問に対しては寛容に応えるお国柄**で無期限での研究が許されたということです。

同じようなことがタイでもありました。タイでは先輩の留学生がタイ人の先生を怒らせてしまうことがありました。絶対にしてはいけないことは?

- (1) 事前の予告なく、授業をサボった
- (2) 授業中に居眠りをした
- (3) 授業中に飲食をした
- (4) 先生を学問的に批判した
- (5) 先生に質問した

実はタイでは全部が禁止行為なのです。



- 私のタイでの留学経験から申し上げます、
- 開発途上国への留学生は、当時も今も稀少です。
  - 言語学の分野では現地経験が必須です。
  - ただし「西洋の先進的な論理」は邪魔なこともあります。
  - 留学の目的は先進的知識を学ぶことではなく、ことばを習得しつつ、現地を味わうことです。
  - メリットは、異文化との「下からの接触」です。
  - 日本人として自分ができることを考え直す機会にもなります。
  - 少数の立場を選ぶことが「異なる視野」、希少価値を生むのです。
  - 論理の根拠にも地域文化性があります。

\* \*

タイ留学のメリットは

- タイをはじめアジアの多くの国々では「学問の権威」、「長幼の序」が生きている
  - 留学当時の指導教授が、現在、学会の重鎮として君臨している
  - 当時の同級生、後輩が大学教員になっている
  - 共同研究を組織するなど、相互交流が円滑に行われる
  - 学生たちに「仏暦 2525 (1982) 年、君が生まれるずっと前に、タイ政府の奨学金でチュラロンコン大学に留学していた」というと、全国どこへいっても無条件に大事にもらえる
- と、いったことが挙げられます。

\* \*

#### ◆現在進行中の「タイ語話しことは」分析から

- 円滑なコミュニケーションには、語学力だけでは足りない
- 「ラグビーのインド」VS「テニスのタイ」  
ボールを持った相手に対して直接ぶつかってくるインド、一方でネット越しにスマートに打ち合うタイという感じです。
- タイ人とは声高な議論や叱責は NG です
- 上司から部下に「あなたはどうか考えるか？ 意見を言いなさい」も NG です。
- 共同、強調が重要です。
- 「私たちはどう考えましょうか？」が正解で、みんなと一緒に進むのです。

\* \*

#### ◆まとめ

時間がまいりましたので、まとめたいと思います。留学、研究キャリアの形成を振り返ると、「**人の行く裏に道あり花の山**」です。この言葉はもともと、投資の世界の格言ですが、多くの人が行く場所よりも、だれも行かないようなところにこそ、満開の桜（チャンスのとえ）が見られるという意味です。誰も通らない、前例のないところを歩く勇気が必要だということです。

世界各地で「**価値観**」「**論理の基盤**」は文化に依存しています。そして、**学問の王道は「理学」と「人文学」ということです。**「理学」とは宇宙であり、生命の世界です。「人文学」とは、多様な人間とどう関わりを持っていくのかということです。「**情報**」ではなく、**実体験を踏まえて相手を観察し、他者と関わりながらともに考えて往くことが大切です。**

ぜひ、若い人たちには論争の前に、現場の観察を広い教養を身に着けて欲しいと願います。

\* \*

#### ◆これからの浦高生に望むこと

常に変化する社会：タイではネット社会の進行とともに「**うつむき社会**」ということばが流行中です。

整理された二次情報だけで知った気になるな！

言語の発話と理解のプロセスでは「呼吸の段落・息継ぎ」「間(ま)」「スペース」、日本語なら「句読点」「漢字仮名交じり」が必須です。

\* \*

#### 浦高の「**尚文昌武、三兎を追え**」への危惧？

- 知・体・情熱は、どれも大事
  - 「優等生」には正論を拒めないという弱点がある
  - 現在の社会がもとめるものに適応しても、社会は変わる
  - 勝利・成功ではなく、幸福を追求すべきでは？
  - 理解力、洞察力を養うのは休養・余裕・鳥瞰と虫の目
  - 必要なのは、人の設定したカダイをこなす力ではなく、自分で課題を設定する力
  - 「世界を再定義する」視野を得るには、「異世界との関わり」体験が大事！
- です。ご清聴ありがとうございました。

\* \*

いつものようにご講演からメモ書きしたものですので、ニュアンスが違っている場合にはご容赦ください。(文責：香田)

#### ◆藤田進氏・北朝鮮による拉致 41 年

##### 藤田隆司氏

浦高 27 回卒業生の藤田進さんが 19 歳の時に川口市の自宅から忽然として姿を消しました。その後、28 年が経過し、平成 16 年に脱北者が



北朝鮮から持ち出した写真から藤田進さんが北朝鮮に拉致されたことや、北朝鮮で生きていたことなどが証され、弟の藤田隆司さんの知るところになりました。警察庁も「特定失踪者」の対象者が 800 人を超える事実を公表している現在、政府認定への手続きと一日も早い帰国を願うと話されました。